

調査結果から

【成果と課題】

◎全国学力学習状況調査

国語... 話すこと・聞くことの単元+B8+B8は昨年度48.3%の正答率をあげていたが、今回は44.2%にまで下がった。一方で、読むことの単元では昨年度の39.0%から55.8%へと大幅な上昇が見られた。また、問題形式別では、記述式問題の正答率が15.4%と他の問題形式より目立って低くなっている。全体としては、大阪市より正答率が4ポイント低くなっているが、昨年の7ポイント差と比較するとその差は縮まってきている。

数学... 図形問題の正答率が40.0%と昨年度の36.8%よりは改善されているものの、府の平均よりも約6ポイント低く、数と式の領域とともに、他の領域と比較した場合は、未だ課題を残している。全体としても大阪府平均との差は11ポイント低く、総合的な底上げが必要である。

理科... 今回、試行的にオンラインで実施された。IRTスコアとはIRTに基づいて各設問の正誤パターンの状況から学力を推定し、500を基準にした得点で表すものです。IRTとは、国際的な学力調査等で採用されているテスト理論で、この理論を使うと、異なる問題から構成される試験・調査の結果を、同じ尺度で比較することができます。

その結果本校は全国・大阪市よりもIRTスコアは低い結果となった。

◎3年生チャレンジテスト

国語... 「知識・技能」観点では府平均の約3.0ポイント、「思考・判断・表現」の観点では約4.0ポイント、正答率が府平均よりもそれぞれマイナスであった。ただ、話すこと・聞くこと分野では、正答率が府平均から0.8ポイントのマイナスにとどめることができている。全体として、約6.0ポイントのマイナスになっている点が今後の課題である。

社会... 「知識・技能」「思考・判断・表現」のいずれにおいても正答率が府平均を下回っている。分野別では歴史に比べ、地理の正答率が伸び悩んでいる。今後の課題としては、地理分野の底上げを含め、全体的な基礎基本の徹底をさらに図る必要があることである。数学... 「思考・判断・表現」の観点で、府平均を正答率で2.0ポイント下回っている。「知識・技能」では5.4ポイント下回っている。領域別ではデータの活用分野が2.4ポイントのマイナスと特に低くなっている。全体として約7.5ポイント府平均を正答率が下回っているため、総合的な学力の底上げが必要である。

理科... 正答率の府平均との差が6.8ポイントのマイナスと全体的な学力の向上が必須である。「地球」領域は1.1ポイント、「生命」領域は3.4ポイント、「エネルギー」領域は0.7ポイント、「粒子」領域は1.4ポイントのそれぞれマイナスであった。

英語... 全体で3.2ポイント、府平均よりも正答率がマイナスの中で、「聞くこと」領域のみについては、正答率が、府平均を0.1ポイント上回った。しかし、全体としては府平均に到達できていないので、学力の総合的な底上げが必要である。

◎3年GTEC(英語力調査)

昨年の3年生に比べると、リスニング力・リーディング力が大幅に伸びた。一方で、ライティング力・スピーキング力は低下しており、学年全体としてのスキル別得手不得手が明確になってしまっている。

◎2年生チャレンジテスト

国語... 平均正答率は府平均に比べ0.7ポイントのマイナスにとどまった。ほぼ府程度の学力は有しているとみることができる。ただ無解答率も0.7ポイント、不平均よりも高く、取り組む意欲に関してのテコ入れが必要である。観点別では思考・判断・表現の分野が他の分野に比べると正答率が高い。

社会... 大阪府の平均から4ポイント近く正答率が低い。ただ無解答率は府平均と0.1ポイント高いだけでほぼ同程度である。観点別では知識・技能の分野が弱い。

数学... 正答率は6ポイント程度、府平均を上回った。無解答率も府平均より1.6ポイント低く、ここ数年で見ると、最も成果のあらわれた結果だったといえる。観点別でもすべての分野で平均を上回っている。

理科... 平均正答率が府平均に比べ約0.8ポイント低いものの、ほぼ府平均と同等の学力を有するとみることができる。観点別では知識・技能の分野での正答率が高い。無解答率は府平均より0.4ポイント高いので、取り組む意欲面に関しては今後強めていく必要がある。

英語... 平均正答率は府平均より7.2ポイント低くなっている。ただ無解答率は府平均より1.2ポイント高いだけにとどまっている。4技能すべてにおいて府平均を下回っている。

◎1年生チャレンジテスト(理社はチャレンジplusテスト)

国語... 平均正答率が府よりも8ポイント程度低い。特に思考・判断・表現の観点における設問の正答率が低い。

数学... 平均正答率は府よりも4ポイント程度低い。特に「数と式」の分野で正答率が低くなっている。ただし平均無解答率は府平均よりも低い。

英語... 府平均より約2ポイント程度低いが、1年の他の教科に比べると、その差は小さい。特に知識・技能の分野では府平均と点数的にそん色がない。無解答率は府の平均より0.8ポイントも低い

社会... 市平均より6ポイント程度正答率が低い。特に地理分野での府平均との差が大きい。ただし無解答率は市平均を下回っている。

理科... 市平均より2ポイント程度正答率が高くなっている。平均無解答率も市平均より約2ポイント低い。

◎全国体力・運動能力、運動習慣等調査

・体力合計点は男女とも大阪市・全国の平均をとともに上回っており、特に男子はここ数年同様の傾向である。今年度は女子が、大きく平均を上回り、体育活動の一定の成果が表れたといえる。ただ年度によって結果にはばらつきがあり、今後は、高水準の結果を年度に関係なく出していけるようなさらなる運動習慣の確立、意識の向上を目指していくことが必要である。

・運動は好きですかの肯定的回答割合は男子はやや平均より低いものの、女子は平均よりも10ポイント近くも高く、「好きこそもの上手なれ」ではないが、子どもの意識に体育的活動に対する肯定的な意識が育まれていると考えられる。

・また1週間の運動時間が60分未満の生徒の割合も低く、意識して体を動かそうとする習慣が根付いていると考えることができる。

【今後に向けて】

◎全国学力学習状況調査

国語... 読み書きを中心に基礎的な学力を身に付けさせることが今後さらに必要である。

数学... 引き続き計算問題等の基礎を確実に身に付けさせることに加え、図形問題など応用的な分野に対応できる学力の構築を図る必要がある。

理科... 1年時からの基礎的な内容を、しっかりと復習していく必要がある。

◎3年生チャレンジテスト

国語... 得意分野を伸ばしながらも、全体的に基礎基本を徹底し、読解力および文章の作成能力の向上に努めていく。

社会... 地理分野の底上げが必要だが、歴史分野とともに基礎基本をさらに重点的に取り組んでいく。

数学... 計算など基礎基本をさらに徹底し、加えて資料の読み取りや関数といった応用分野にも対応できる力を養っていく。

理科... 「生命」領域が特に弱い傾向があるので、その部分の底上げと全体的な基礎基本の徹底を図っていく。

英語... 聞く力である程度結果が出たのは喜ばしいが、まだまだ基礎基本に加え、記述問題に対応できる力が不足しているので、それらを含め全体的に学力の底上げを目指していく。

◎3年GTEC(英語力調査)

市平均との比較では、4技能いずれにおいても下回っており、全般的な英語力の底上げが急務である。基礎基本の徹底と、Cネットなども最大限に活用した、英語に対する興味関心の喚起をしっかりと行っていく。

◎2年生チャレンジテスト

国語... 正答率は府平均とほぼ差がないので、今まで以上に基礎学力の定着に力を入れることで、生徒の興味関心を高めていく。

社会... 生徒の興味関心を高めることが欠かせない。さらに平素の学習を基礎学力の定着を主眼に進めていく。

数学... 今回の結果に油断することなく、数学に対しての関心意欲を高めていき、全体的な基礎学力の底上げを図っていく。

理科... 視聴覚教材なども適宜活用しながら、生徒の関心意欲を高め、基礎学力の底上げを図っていく。

英語... 無解答率がそこまで高くないということで、英語に対する意欲は決して低くないと分析できる。基礎的な学習の繰り返しを継続して行っていく。

◎1年生チャレンジテスト(理社はチャレンジプラス)

国語... 府平均から離されてしまったので、今まで以上に国語の基礎となる読み・書きの徹底を図っていく中で、基礎学力の定着を図っていく。

数学... 基礎的な計算問題など、基本の反復練習を継続して行い、基礎学力の底上げを図っていく。

英語... 英語に対しての関心意欲を高めていく。そのために視聴覚教材の活用・Cネットの先生との触れ合いを今以上に進めていく。

社会... 全般的な基礎学力の向上を図っていく。そのためにICTや視聴覚教材の積極的な活用を推進する。

理科... 府平均を上回ることができたが、今後も油断することなく、全体的な学力の向上を図っていく。実験やICT、視聴覚教材の活用などで、生徒たちの興味関心を引き出し、理科が好きになっていけるよう努めていく。

◎全国体力・運動能力、運動習慣等調査

全国的に、かつてはどの学校でも普通に行われていた体育的な行事が縮小傾向にある中、本校では、体育大会はもちろんのこと、夏場の水泳大会や冬場のマラソン大会など、かなり精力的にその事前の取り組みも含めて継続して実施してきている。特にマラソン大会は、クラス単位で応援計画を練り、プラカードを作成し、マラソンという個人競技の中に団体戦としての要素を取り込み、クラスが一致団結する絶好の機会として位置づけている。そんな中で、得意な生徒のみならず、苦手な生徒であっても、クラスの一員として最後まで頑張ろうとする粘り強さを発揮することができている。さらに、これら以外にも、各学年単位では適宜、スポーツ大会や球技大会を、生徒の自主的な運営の下で実施しており、こういったことも子どもの体力向上に寄与していると思われる。

ただし、一定の見学者の存在は今後の課題である。特に水泳大会における女子の見学が目立つ。昨今、優しさのみに根差した「こどもファースト」の世の中の風潮が、ゆがんだ形で現出している象徴のようにも思える。子どもに対しては、優しさも大事だが、かつてのように一定の厳しさが根底にある関りも必要だという当たり前のことも、世の中の的にもっと流布させていくことが、子どもの無用な甘えを払しょくし、たくましさを育む上で必要であると考えている。